

クレームンス・ブレンターノの デュルメン時代をめぐる覚書

林 真 帆

1818年9月14日、ブレンターノはヴェストファーレン地方のデュルメンへ発つ。

以後の彼について、ハイネは『ロマン派』(1833)中で次のように述べる。

ブレンターノ氏は15年来、世間から離れて暮らしている——自らのカトリック信仰の中に閉じこめられ、まさにその壁にぐるりを囲まれて。(…)彼は持ち前の破壊衝動をもって、何よりもまず自分自身とその詩的才能をめちゃくちゃにしまったのだ。現在(…)フランクフルトに隠者然とひき籠もって、カトリック・プロパガンダの通信員をしているが、その名は最近ではほとんど忘れ去られてしまった。(…)

また、アイヒェンドルフはブレンターノをむしろ「民衆に顧みられなかった“民衆志向のロマン派詩人”」とし、『歴史・政治新聞』47年号で、彼が悔い改めた後はカプチン僧となり、ポーランドの修道院に入ったという噂に言及している。

しかしこれらの記述は、必ずしも正確な事実在即してはいない。デュルメン時代(1818-24)の後、ブレンターノはドイツ南部に拠点を移してバイエルンの信仰覚醒運動に参画したり、カトリック教化文学やメールヒェン、抒情詩の分野で活動した。20-30年代前半、J・ゲレスとともに雑誌『カトリック』の編集に携わった折には、出版社や政府・教会当局との駆引に“ロマン派詩人”のイメージからは意外なほどの敏腕ぶりを発揮している。

デュルメン行の前年、17年2月にブレンターノは総告解をした。ベルリンで11年にアルニムが創設した「キリスト教ドイツ円卓会議」で長らく「書記」——円卓会議における通称——をつとめた他、2度めの長期滞在(1815-18)中はゲルラッハ兄弟、フケー、ミュラーらとの交友、キリスト教・ゲルマン的文学サークル「マイケーファー」、うら若き敬虔派詩人ルイーゼ・ヘンゼルと出会ったシュテーゲマン家のサロンなどを転々とした後の「帰正」であった。しかし当時プロテスタント、特に敬虔主義とカトリック教会は厳しい対立関係にはなく、従って転向さえ今日から考えるほど困難ではなかったという事情、しかも1808年に改宗したFr・シュレーゲル、『キリスト教世界、すなわちヨーロッパ』(1802)にカトリック的志向¹⁾が顕れているノヴァーリスなどとは違い、イタリア系のブレンターノ家は本来カトリックであったことを考えても、詩人の総告解を一族やカトリック教会の思惑ど

1) ただし、アイヒェンドルフが『ドイツにおける文学の歴史』中でプロテスタントのアルニムにも「カトリック的志向」を認めているように、ロマン主義では„katholisch“とは必ずしも“ローマ・カトリック”には限定されず、むしろ“普遍人間的”という語源的な意味に用いられることが多かった。

おりに「大転換」、もしくはベッティナー・v・アルニムやハイネら文学者の立場から「精神的自殺行為」と評価するのは単純すぎるだろう。ブレンターノの執筆活動を文学と宗教の二項対立の図式で分断することの不毛さを訴えたフィエートアの主張(1924)は1960年代以降、原典資料の整備と自由ドイツ文書館(Freies Deutsches Hochstift, Frankfurt a. M.; 以下FDHと略称)関係者の検証作業によってようやく実を結び、総告解を境とした初中期と後期活動を「裂けめのある統一体 zwiespältige Einheit」もしくは「連続体 Kontinuität」としてとらえる認識が共通の基盤となりつつある。

しかし、文献学主義の主流派からポスト構造主義の影響を受けた新進まで、後期活動を文学史の枠内で(再)評価しようとする各世代の研究者たちの試みは、現在なお途上にある。その際多くの問題性をはらんで横たわっているのは、総告解よりもむしろ、それに続く6年余のデュルメン時代であろう。時間的な長さもさること乍ら、「^{ステイグマ}聖痕をもつ尼僧の見神」を記録する書記、もしくはその筆記録というイメージが先行したために、いわゆる「エメリク文書」は今日にいたるまで——特にロマンス系——ヨーロッパ諸国で敬虔なカトリック信者の“家庭用愛読書”となる一方、非キリスト教圏・日本においては長らく文学研究の対象外におかれてきた。

本稿では、ブレンターノのデュルメン時代およびエメリク文書をめぐる伝記的・文献学的資料、およびごく概観的な19—20世紀の受容事情を紹介し、今後の研究の基礎作業としたい。なお、本稿の記述はフリーヴァルト、ガイェクの他カタン、マテス、シュミットらの研究に大きく拠っていることをあらかじめ申し上げておく。

*

1815年にウィーンからベルリンへと拠点を移したブレンターノは、まず劇作家として再挑戦をはかる。「虚栄と喧騒の都」ウィーンに比べ、産業革命の勃興とそれにとまなう人口集中で急速に近代的都市へと成長しつつあったプロイセンの首府は、心機一転には格好の場と思われた。しかしここでも戯曲の評判は芳しくなく、またヘンゼルと抒情詩の分野で「共同芸術」を試みるが、彼女との関係もやがて変質していく。そもそもブレンターノ自身、文壇における名声は『少年の魔法の角笛』第1部、ハイデルベルク・ロマン主義を頂点に下降線をたどり、10年代後半には青年時代の彼が批判・嘲笑したイエーナ・ロマン主義とひとからげに「時代遅れの自律性文学」と見なされていた。

そこでやむなく、彼は散文作家として活動することになる。フランクフルトの豪商の財力に支えられてきた彼も、この時期はボヘミアの領地経営が傾き、自らペンで糊口をしのがねばならなかったのである。大衆文学の隆盛を背景として、散文作品には戯曲、抒情詩作品をはるかに上回る稿料が支払われ、売行や人気もますますだったが、本来劇作家を芸術的に最も高く評価していたブレンターノは、かえって屈折した敗北感を抱かずにいらなかっただろう。折しもベルリンでは友人の画家・建築家シンケルが舞台美術の分野でも華々しく活躍しており、それとひき比べて「フランスの“文士”のように“作家”が社会的に認められていない」ドイツの新興都市で、「おいしい、ふくれた肝をもつ病んだガチョ

ウ」(『勇敢なカスバルと美しいアンネルの物語』, 1818), 「生まれついでての詩人 homo poeta」は生活者としても, 芸術家としても追いつめられていく。15-17年頃の日記や作品にはこうした事情, 心境がそれぞれに影をおとしており, 中期以前の作品を何篇か改筆したのもこの時期である。

アンナ・カタリーナ・エメリクの噂は16年2月頃, マイケーファーの仲間から聞き知っている。元・アウグスティヌス会修道女エメリクは聖痕をもち, 教会暦に合わせてそこから血が滲むというので評判になった。また, しばしば失神状態に陥ってキリストや聖人たちの幻を視るとも伝えられた。彼女の聖痕および聖遺物識別能力については, ブレンターノ以前にミュンスターの司教総代理ドロステ・ツー・フィシェリング(13年6月), エメリクの治療医ヴェーゼナー(16年10月)や詩人の弟でやはり医師のクリスティアン(17年7月)らが記録を残している。その他マイケーファーからはルートヴィヒ・V・ゲルラッハ, Ch・V・シュトルベルクなどがデュルメンを訪れているが, とりわけカトリックに転向したシュトルベルク一家は, この“当代の聖女譚”に強い関心と感銘を覚えたという。

ブレンターノのエメリク訪問は, 自らもカトリック信仰へと傾いていた牧師の娘ヘンゼルの勧めによるが, これには両者の個人的な思惑の方がむしろ強く働いている²⁾。デュルメン到着当初の日記に記されたエメリクの幻視はヘンゼルのこと, 自身の少女時代の回想, 宗教的・政治的諸論争, 聖遺物に誘発されて視た聖人たちの姿などが中心である。しかしヘンゼルがブレンターノに無断で改宗し(18年12月), エメリクを中心にブレンターノ, ヘンゼルの3人によるささやかな“信仰共同体”の夢が破れると, 彼は世俗の詩作を放棄して「預言的詩人 poeta vates」として再出発する決意を最終的に固める(19年春)。そして同年12月, 神学書を除く膨大な蔵書をすべて競売にかけて処分する。

まずエメリクの伝記を書きとめた後, 彼は「疑うトマス」よろしく, 聖痕の検分を始めている(20年1-8月)。これは聖遺物や十字架などでエメリクの手足に触れ, 聖別していない器物と区別できるかどうか確かめるものであった。彼女は聖物類が部屋に隠してあるだけでも反応を示したとされ, 検分は満足のいく結果に終わっている。

しかし何より詩人の関心をひいたのは, もちろん尼僧の幻視能力であった。20年7月末から, 後に『イエスの生涯』となる見神の記録が始まる。ブレンターノは近所に部屋を構えて毎日エメリクを訪れ, 意識喪失状態で視た幻や前の晩の夢を「聞き書き」するのである。心身ともに脆弱な彼女の話は順不同で断片的, かつ細部が曖昧なことも多かったが, 彼はこれを聖書正典および外典の記述に従って若干順序を入れ換えたり, 小題ごとに整理

2) ヘンゼルは胡散臭くしつこい求婚者ブレンターノをデュルメンへ遣ることによって自分の体面を保とうとし, 他方ブレンターノはエメリクの霊的感化によってヘンゼルの改宗させ, 修道女を中心に3人だけの“信仰共同体”—— „menage trois“ を築こうとしていた。(これは, 例えばアルニム, ゴフィー・メローとブレンターノという3人の結びつきに彼が文学的・精神的拠りどころを求めた心境にも通じている。)

また, ヘンゼルは最晩年まで“エメリク信仰”をもち続けたが, ブレンターノとの関係についてはあまり多くを語ろうとしなかった。このような彼女の態度が, やがて後述するようなシュメーガーの行為を招くこととなる。

して目録を作るなど「編集」作業を行なった。さらに翌22年からは、各章の冒頭に日付がキリスト教およびユダヤ教暦で記されている。

エメリクの死(1824)後、ブレンターノは遺された「とてつもない宝物」の「遺産管理人」をもって任じ³⁾、転々と住居を移して晩年は半ば無宿者のような生活を送り乍らも、筆記録の整理を続ける。『聖処女マリアの生涯』『イエスの修業時代』『われらの主イエス・キリストのご受難』と続く「イエス三部作」を、本来は救済史の順に従って発表する計画であったが、匿名による『ご受難』(1833)が生存中唯一の刊行となった。彼が最期まで手がけていた『マリアの生涯』はクリスティアン夫妻によって52年に、『われらの救い主イエス・キリストの生涯』(『修業時代』)は58-60年、エメリクの伝記は67-70年に、詩人のデュルメン日記をも含む草稿をもとに、それぞれレデンプトール会士シュメーガーの編集によって出版された。文化闘争を生きのびた手稿類は99年、エメリクの列福問題審査にもなってローマ法王庁へ移された後レデンプトール会に返却され、現在はFDHが保管している。

「三部作」はシュッテコプフ版(1913)および歴史校訂版全集(1983-90)に所収の他、ブレンターノ没後150周年記念論集(1993)の巻末には

- (1) 『マリアの生涯』：アシャッフエンブルク⁹1989,
- (2) 『イエスの生涯』：アシャッフエンブルク¹¹1989,
- (3) 『ご受難』：ライブツィヒ²1982, アウクスブルク¹⁶1989,
- (4) その他の見神録：アシャッフエンブルク⁵1985, ミュンスター²1981, フェルトキルヒ¹1985, ケヴェラー²1986, シュタイン/ライン⁹1986

などのエメリク関連単独刊行目録が記載されている⁴⁾。また今世紀後半になっても「三部作」は各国語訳の抄本が巡礼地で売られたり、1969年11月にはフランス国营ラジオ、テレビで『アンナ・カタリーナ・エメリク受難』が、71年3月にはイギリスBBCラジオで朗読劇『イエス・キリストのご受難』が放送された、などの記録も残っている。

*

ところでブレンターノの「書記」活動は、“エメリク・ブーム”のさ中にあってもまったく順調だったわけではない。ヴェーゼナーは詩人の来訪からわずか数ヶ月後以来、彼女を「寝ても覚めても質問攻めに」し、「日ごと重たくのしかかってくるブレンターノという十字架」をデュルメンから遠ざけてくれと繰り返し書簡で訴えている。「書記」は朝早くエメリクを訪ねてきて、彼女が前の晩に見た夢を書きとった後、自室でその「テキスト批判」を行なう。彼は些細な矛盾や曖昧な点——人物の衣の色や手の位置まで——も見逃さず、

3) ブレンターノはエメリクの亡骸から手を切り落として聖遺物として保存しようとしたり、ヘンゼルを誘って墓を掘り起こし、魂が去ったあとの肉体にも聖物触知能力があるかどうか実験を試みている。すでに腐敗が進んでいたため断念したが、“デュルメンの奇蹟”に対する彼の妄執のほどがうかがえる。

4) 『マリアの生涯』は1926年に第30版、発表直後から高い評判を得た『ご受難』は、31年に第58版が刊行されている(s. Frühwald 1973, S. 241)。

午後再び現れて尼僧にしつこく問い質す。彼女の体調にかかわらず、証言を「強要」するような態度も稀ではなかった。これが毎日続くにおよんで、医師はエメリクの「平和な日常生活も、健康も、生命さえ」脅かしている張本人を告発せざるを得なかったのである。1819年7月、プロイセン政府の司法・警察調査団がデュルメンを訪れた際には、ブレンターノは「事実を歪曲、もしくは不利な証拠を隠滅する恐れがある」として立会いを許されなかった。しかし彼はディーペンブロック家に待機して自ら政府宛の上申書を書き、調査団が去るとヴェーゼナーの手を尽くした妨害工作や、「もう2度と来ないでほしい」という彼女の懇願を無視してデュルメンへ戻る。ヴェーゼナーとエメリクの聴罪司祭リンベルク、そして2人が尼僧の聖性を理解していないと批判するブレンターノの対立は、彼女をはさんでその後も続くが、「書記」は幾度かの一時的な不在を除けば、けっきょく彼女の死まで当地に留まった。

ではブレンターノは何のために、エメリク証言の「首尾一貫性」「客観性」にこれほどまで拘泥したのだろうか。彼が目ざすエメリク文書の「客観性」とは、どのようなものだったのか。また、彼はこの文書によって何を企図していたのだろうか。

一般に理解されているより早く、ブレンターノは1800年前後から「客観的」な詩作を目ざしてきた。その彼にとって、作品がロマン派的な主観的自我によらず、外界の事物をありのままに反映 *spiegeln* したものであるという「客観性」「真正性」は、第一に追求すべき価値であった。中期以前におけるこうした志向は、例えば登場人物が実在の人物と知己関係にあること、作品が筆者の個人的事情ではなく、利他的動機や外部からの要請によって成立したものであること、作中に民話、民謡や第三者から伝えられた逸話が挿入もしくは織りこまれていること——などの形で、具体的に表われている。ヨハンネス（『遍歴学生の年代記』）、ピオンデック（『ロザリオのロマンツェ』）などにみられる無意識・没我状態の語りや歌も、この範疇に属する。

同様に、前述したキリスト暦／古ヘブライ暦による日付の記入は、エメリクの見神をユダヤ教、キリスト教を経て19世紀の現代にいたる救済史の中に位置づけようとする試みのあらわれであるし、聖書の記述に照らした「編集」作業も、「客観的」資料に基づくかぎりにおいて、許容範囲⁵⁾にとどまると考えてよいだろう。

尤も例外はあるにせよ、ブレンターノに近い、従って知的名声にも恵まれた人々の間ですら、エメリク文書の評価は概して否定的だったと言わざるを得ない。「詩人」肌の彼はもともと「公平無私」な「書記」の仕事に向かず、尼僧の言葉を書きとめながらそこに勝手な「詩的潤色」を加えていたのに違いない——というのが大方の見解だったが、ことはそうした“事後的”な「主観的」介入の次元に留まらない。

ブレンターノは、しばしば聖書の他に私蔵の聖人伝や神学書類をエメリクの枕もとで「読み聞かせ」た。これは彼女がスムーズに眠りに入れるための配慮だったというが、彼はそ

5) 最初の筆記稿から印刷用の決定稿までは、3-4段階の推敲が行なわれている。その過程は例えば各段階で作成された索引からも明らかだが、各稿の比較対照によって、さらに興味深い結果が期待できる。

のあとで視た夢が本の内容と違うとあって責めたてた。エメリクが「書記」の意を迎えたり、通り一遍のことを言うのも同様に嫌い、「まったく自然に」——特に半覚醒状態で——話すよう求めた。とはいえ二人のやりとりはまさに誘導尋問で、しかも多肢択一式に、最初から言うべき——つまり択ぶべき答が与えられていることも少なくなかった。特に19年7月の調査直前には、ブレンターノは当時の高名な神学者・説教家ザイラーの話やマイスター・エックハルトからの朗読を聞かせ、⁶⁾ 尼僧の聖痕と見神が批判的な調査官にも「真正」との印象を与えるよう“準備”した⁶⁾。それでもなお彼は結果を樂觀できず、もう1度自分をまじえた委員会を組織して調査を行なってほしいと訴えているのである。

ベッティーナ、ディーペンブロック兄妹やヘンゼルら、ブレンターノの性向をよく知る人々は、彼が尼僧に「多大な影響」を与えていることを察していた。M・ディーペンブロックは24年初めすでに、エメリクが「書庫という紙の世界、周囲の人たちの思考や想像力の世界から、自分が視る幻の素材や装飾を、無意識のうちに得ていた」のではないかと、特に詩人の「主観がそれと知られず、客観的な、上からくる真理として彼女には受けとられ、また彼に再び語られていたのではないかと述べている(ゲレス宛書簡)⁷⁾。

こうして得られた証言と「客観的」資料との「整合性」をも、一般通念に照らして「客観性」「真正性」と呼ぶうるかどうかはすでに明らかだろうが、次に時代背景をふり返りつつ、エメリク文書の意図と実際の反響、受容について述べていきたい。

1803年、「偉大なる反キリスト」^{アンチ}ナポレオンとの和約を受けた神聖ローマ帝国委員会主要決議によって領邦の境界線が変更され、従来の「1領邦1宗教」制度が流動化すると、教区再編成や修道会の興廃、さらに帝国解体などが相まって、(旧) 国内は16世紀以来の宗教的混乱に陥った。連邦条約(1815)もこの事態を收拾できず、カトリック、プロテスタント両陣営とも時代に対応する教義の見直し、活性化を迫られ、活発な神学論争がくり広げられた。「大革命」の直接的影響を免れ、観念論の一方神秘主義の伝統やロマン主義の中世志向を底流にもったドイツでは、フランスにおけるほど徹底した無神論は現れなかったが、それでもなお典礼や宗規の合理主義的改革、教会の国家への従属を唱えるフェブロニウス主義、恩寵を否定し、信仰の基礎を人間理性に求めるヘルメス主義などの“異端”思想が、正統派の教義・神学に対立した。

ブレンターノは“エメリクの奇蹟”によって、こうした混迷状況を解決に導こうとする。「デュルメンの書記」はその受け手⁸⁾として、宗教的自由主義に陥った知識人層を想定して

-
- 6) このような繰り返しの中で幻視が不鮮明になっていくと、効果を高めるために阿片が使われたとの説もある。だが死の約半年前、23年5月頃から彼女の容体はますます悪化し、幻視はまったく見られなくなった。(そればかりか、18年クリスマス頃にはすでに、手足と額の聖痕は消えてしまっていた。)
- 7) 実際のエメリクはブレンターノが伝えるほど無教育ではなく、周囲の人々が古今の神学書や最新の神学的問題について議論するのに好んで耳を傾け、時には自ら意見を述べることもあったという。従って、マテスはブレンターノ到着以前の見神も、こうした議論に誘発された可能性を示唆している。
- 8) ブレンターノはエメリク文書を「書物」の形で世に問うべく「編纂」作業を進める一方、親しい人々に筆記録を「読み聞かせる」ことも多かった。

いた。救済史もしくは物語 Heilsgeschichte が「まったく文字を知らない」農民の娘エメリクの幻視を通して啓示されることは、真理への到達、信仰の獲得が「識字・文字化」に象徴されるような近代的理性の働きなどによらず、あくまで神の恩寵によってもたらされることを証明するはずであった。さらに聖書の科学的・批判的研究がイエスの歴史的事実をもその対象とし、イエスの神性を否定する学説⁹⁾さえ現れてくると、ブレンターノの「イエス三部作」はより明確な目標をもつようになる。彼は聖母マリアの誕生から被昇天にいたる生涯を大枠に、エジプト避難の旅とゴルゴタの丘で悔悛した罪人の逸話、洗礼者ヨハネの死やイエスの布教活動、そしてまた受難といった救世主の物語を能うかぎり「史実」に即して、かつ写實的に描き、イエスの伝記がキリストの神性と矛盾するものではないこと、つまり紀元1世紀のパレスチナに生きたナザレびとイエスが神の子キリストに他ならないことを主張しようとしたのである。

もちろん、初期ロマン主義の「空虚な」観念論や当時のプロテスタント神学の極端な人間中心主義、また政府と教会の——新体制では、プロイセンのようにカトリック教会がプロテスタント政府の統治下におかれる例が多かった——権力闘争に巻き込まれることを嫌ったブレンターノは、こうした神学論争に好戦的、あるいは分派的な態度で与しようとしていたのではない。彼が目ざしたのは近代の主知主義を克服した素朴な信仰への「帰正」、恩寵による共同体の回復という、それ自体はきわめて保守回帰的な世界観の実現であった。

しかし、解放戦争後「平穏と治安」「平穏と秩序」という政治的スローガンのもと、正義より法的安定が優先されていたプロイセン社会においては、“エメリク伝説”の流布は、かえって世の「安寧秩序」を乱す「反体制・革命的陰謀」¹⁰⁾であった。19年の調査団派遣は単なる先ぶれにすぎず、やがてブレンターノは検閲や監視の厳しくなったプロイセンから、宗教的に寛容で文芸にも造詣と理解の深いルートヴィヒ1世治めるバイエルンへと、移住を余儀なくされる。

他方、カトリック教会との関係について——13年2月、エメリクの噂が初めてデュルメンに広まると、当地の司祭や医師たちの報告によって司教総代理ドロステ・ツー・フィシェリングはただちに調査団を派遣している。だが、ローマ聖庁の公認を待たずに“デュルメンの奇蹟”が民間に広く流布・定着してしまうことは、19世紀に隆盛をきわめた教皇至上主義もしくは不可謬説に反する恐れがあった。

42年に詩人が亡くなると、単独相続人クリスティアンは、クレメンスが協力者・後継者と恃んだハーネベルクから見神録を譲り受ける。兄とカトリック当局の調停役として気苦労の絶えなかった彼は、これ以上エメリク文書が論争を惹き起こすのを懸念したのである。一門の名誉のため、「ロマン派詩人の改悛」を強く印象づけることを狙った初版全集(1855)にもエメリク文書は収録せず、自分の死後は誰もこの草稿類に手を触れてはならな

9) 最大のセンセーションを呼んだのが、35年のシュトラウス『イエスの生涯』であった。

10) ブレンターノ以前には、エメリクが仕えていた亡命フランス人司祭ランペールが、“伝説”を捏造して世情の攪乱を企てているとも疑われた。

いと厳命した。しかし、『マリアの生涯』が刊行された52年はまさにマリア論の一大流行期にあたり、54年に「無原罪の御宿り」が教義とされるに至って、聖庁との対立はひとまず回避される。

そしてこのような政・教両当局との関係の中で、「三部作」の受容はしだいにブレンターノ本来の意図とは別の方向に向かっていくこととなる。

まず『マリアの生涯』に感銘をうけた人々は聖母の終焉の地、小アジア・エフェソスへこぞって押しかけ、教皇ピウス9世は、紀元4ないし5世紀(!)の礎石の上に建てられた「マリアの家」を祝別し、その真正性を公式に認めた。民間信仰が必ずしも学問的正当性を前提としないことは言うまでもないが、何より知識階級の改心を促そうとしたブレンターノの野心はみごとに裏切られる¹¹⁾。

シュメーガーは教化文学としての「三部作」評価に大きく“貢献”した人物の1人で、また草稿類が文化闘争期(1871-79)に散佚・破棄をまぬかれたのも、彼およびレデンプトール会によるところが大きい。しかし、熱烈な教皇至上主義のレデンプトール会士は反面ヘーゲル学派やイタリアの民族国家運動、ザイラーのエキューニカルな神秘主義などに対する批判を明確に意図しており、そのためシュメーガーのエメリク文書「編集」作業は、「デュルメンの書記」のそれにも増して恣意的であった。さらに彼は草稿に直接書きこみをして自らその保存状態を著しく損なっただけか、関係者のプライベートに触れた部分を、本来の所有者ブレンターノ家には無断で抹消もした。イエズス会士ディール、クライテンによるブレンターノ伝(1877/87)は、これらの既・未刊行資料およびヘンゼルの証言に基づいて編まれており、エメリク問題に否定的な立場をとってはいるものの、従ってその資料的根拠じたい「客観的」「真正」とは言えない。

世紀転換期以降、ブレンターノの作品ばかりでなく生涯にも関心が高まり、総告解以後の時期をも扱った伝記が多く著される。だが初版以来の全集の傾向、さらに法王庁に貸与されたエメリク文書の一般閲覧が不可能だったという事情もあって、ディール、クライテンの共著も含め、これらの伝記はCh・ブレンターノ夫妻やヘンゼルが造りあげた「ロマン主義という前非を悔いた教化詩人」像の反復的継承の域を出てはいない。

1923年、ヒュンプフナーは聖庁に『クレメンス・ブレンターノのエメリク筆記録の信憑性……』を提出した。彼は幸運にもローマで文書の閲覧を許され、デュルメン時代の日記や筆記録、およびブレンターノ兄弟やシュメーガーらの刊行版とを詳細に比較検討して

11) 『ご受難』は早くも版元ぎれとなり、第2版は大衆廉価版で出そうという提案がなされた。しかし、ブレンターノはこの書物が「中流の連中」「素朴な市民や農民」にすでに広まりすぎたこと、それにひきかえ学者たちは「ほとんど見向きもしない」ことに不満の意を示している(34年1月)。

またブレンターノは元来「三部作」の売上げを全て慈悲の修道女会に寄付するつもりでいたが、クリスティアンの2人の息子——哲学者フランツ、国民経済学者ルヨ——は母親を説得してエメリク草稿をレデンプトール会に譲渡、報酬の1500マルクは布施料として、ある貧しい家族の経済援助にあてたという(1876)。例えばこれらの逸話も、エメリク文書が一般に教化文学として受容されていった遠因ではないのだろうか。

いるが、これは調査の目的からしても成果の点からも、純粋に学問的なブレンターノ研究、とりわけ詩人像の修正にはさほど大きく寄与するものではない。エメリクと同じアウグスティヌス会に属していた彼は列福問題審査を有利に運ぶことを狙って、一部故意に事実でない報告をしている。エメリク問題を初めてブレンターノの視点からとらえ、デュルメン時代をブレンターノ研究全体の枠組の中に位置づけようとしたアードム(1926)も、ヒュンプフナーへの反論を試みつつ資料的には彼に大きく依存しているために、やはり文献学の面で不備は否めないのである。

エメリク文書の厳正な原典批判は、66年のカタン論文によって端緒を開かれた。しかし、この見神録が成立当初から現実の政治・宗教問題と密接に結びついており、関係者らのさまざまな思惑や党派心による歪曲・曲解を受けてきたため、却ってその存在を完全に「忘れ去られて」しまうことなく、——ごく限られた専門家の間ではあれ——常に一定の関心をよび続けてきたとも考えられる。

*

以上、ブレンターノのデュルメン時代をめぐる事情およびエメリク問題の経緯について述べてきた。1963-68年の習作版全集には「宗教的著作」は収録されていないが、この全集編纂に携わったフリーヴェルトとガイェクは、69年に揃って、ブレンターノの後期活動を扱った教授資格請求論文を発表した。歴史校訂版全集第24-28巻「宗教的著作」には編者としてガイェク、マテスが名前を連ねており、このマテスが70年代以降、カタンの後を受けてエメリク文書の緻密な原典研究を積み重ねてきた。

メディア論の視点からエメリク問題を論じたシュミットは、19世紀後半以降の病理・病跡学、精神分析学の研究書からも「事例エメリク」に言及した文献を多数挙げているが、本稿ではそこまで立ち入ることはできなかった。

ガイェクは93年論文の結語で、文献学的基礎作業がひと段落した現在、今度はエメリク文書を「文学作品として」「文学史の枠内で」(再)評価していく営為が求められると述べる。例えば、G・シュルツは「フランス革命から王政復古まで」と題した文学史の第2巻(1989)において、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスター』や『ファウスト』、ノヴァーリス『夜の讃歌』などとの関連を示唆している。

ともあれエメリク文書は、1世紀半余を経てようやく、政治的・宗教的党派性に偏らない念願の「学問的関心」を見いだすに至った。むろんその関心が「近代的科学主義」に基づいて“エメリク”の「脱・神話化」を推し進め、文書ばかりか総告解後のブレンターノまでも「文学」の領域に引きずり出そう——もしくは引き戻そうとしていることは、「詩人」の意図¹²⁾にまったく反するものではあるが。

12) トゥンナーは、「三部作」もフランスでは「知識人層」に少なからぬ影響を与えたとし、論文の副題にある2人の他にユイスマン、プロウ、ゴルティエ、ヴァレリー、また、ドイツではリルケ、ホーフマンスタールなどの名を挙げている。

しかし、これらの人々は詩人など芸術家が主で、彼らは「神の靈感を受けた gottselig」エメリ

参考文献

- Clemens Brentanos sämtliche Werke*, H. Amelung / V. Michels u. a. (Mitw.) / C. Schüddekopf (Hg.), München / Leipzig 1909ff.; Bd. 14・2, W. Oehl (Hg.), 1913.
- Clemens Brentano. Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*, veranst. v. FDH, hg. v. J. Behrens / W. Frühwald u. a., Stuttgart 1975ff.; Bde. 24-28, J. Mathes / B. Gajek (Hgg.), 1983-90.
- *
- Adam SCJ, Josef: *Clemens Brentanos Emmerick-Erlebnis. Bindung und Abenteuer*. Mit 8 Tafeln, Freiburg i. Br. 1956.
- Frühwald, Wolfgang: Stationen der Brentano-Forschung 1924-1972, in: *DVjs*47 (1973), S. 182-269.
- ders.: Gedichte in der Isolation. Romantische Lyrik am Übergang von der Autonomie zur Zweckästhetik, in: *Historizität in Literatur und Sprache . . .*, W. Müller-Seidel (Hg.), München 1974, S. 295-311.
- ders.: *Das Spätwerk Clemens Brentanos (1815-1842). Romantik im Zeitalter der Metternich'schen Restauration*, Tübingen 1977 (Habil. 1969).
- ders.: Das Wissen und die Poesie. Anmerkungen zu Leben und Werk Clemens Brentanos, in: *Clemens Brentano. Beiträge des Kolloquiums in FDH 1978*, D. Lüders (Hg.), Tübingen 1980, S. 47-73.
- Gajek, Bernhard: *Homo Poeta. Zur Kontinuität der Problematik bei Clemens Brentano*, Frankfurt a. M. 1971(Habil. Heidelberg 1969).
- ders.: Die Brentano-Literatur 1973-1978, in: *Euphorion*72 (1978), S. 439-502.
- ders.: Der romantische Dichter und das Christentum. Clemens Brentanos religiöse Schriften, in: *Clemens Brentano 1778-1842. Zum 150. Todestag*, H. Schultz (Hg.), Bern 1993, S. 109-132.
- Hümpfner OESA, Winfried: *Clemens Brentanos Glaubwürdigkeit in seinen Emmerick-Aufzeichnungen. Untersuchung über die Brentano-Emmerick-Frage unter erstmaliger Benutzung der Tagebücher Brentanos*, Würzburg 1923.
- Kastinger-Riley, Helene-M.: *Clemens Brentano*, Stuttgart 1985 (SM213).
- Katann, Oskar: Die Glaubwürdigkeit von Clemens Brentanos Emmerick-Berichten. Zum gegenwärtigen Stand der Quellen und der Forschung, in: *LJb NF*7 (1966), S.145-194.
- Mathes, Jürg: Ein Tagebuch Clemens Brentanos für Luise Hensel, in: *JbFDH*1971, S.198-310.
- ders.: Ein Bericht Clemens Brentanos aus Anlaß der staatlichen Untersuchung Anna Katharina Emmericks im Jahre 1819, in: *JbFDH*1972, S. 228-276.

クの見神録からむしろ「芸術的靈感」を得ていった。——もちろん、「芸術家」が「宗教的作品」もしくは「宗教芸術」——プロワは、エメリク自身を「優れた詩人」と見ていた——に触れて、創作のための「啓示」を得るとは、ままたることではある。

- Schaub, Gerhard (Hg.): *Clemens Brentano. Sämtliche Erzählungen . . .*, München 1984 (GK7625)
[Nachwort].
- Schmidt, Hans-W.: *Die Erlösung der Schrift. Das Buchmotiv im Werk Clemens Brentanos*, Wien 1991.
- Schulz, Gerhard: *Die deutsche Literatur zwischen Französischer Revolution und Restauration. 2. Teil. 1806-1830*, München 1989.
- Tunner, Erika: Die »denkende Klasse« und Clemens Brentanos Emmerick-Schriften. Zum Briefwechsel zwischen Max Jacob und Alain Messiaen, in: *JbFDH*1980, S. 259-271 u. a.